

エッセイ — 特集：「子どものことば」を育むとは — 親子の視点から

愛着関係の中で育つことば

息子の自立に向けた成長の物語

子安 芙美*

© 2023. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

「家の中は日本語、一歩外に出たらタイ語と英語。全てがわからないって、どんな気分？」

当時4歳だった息子にそう尋ねたことを今でも鮮明に覚えている。これは、私が最初に海外で生まれ育つとはどういうことなのかを疑問に思った時に浮かんだ問いだった。返事は「わからない」だったように記憶している。4歳の彼には質問の意味もよくわからなかったことだろう。

我が家はタイに住む日本人家庭である。2011年に夫の仕事の都合でバンコクにて駐在生活を始めた。2人の子どもたちはバンコクで生まれ、日本に住んだことのない日本人である。私たちの住んでいるところは日本人の多くが住んでいるエリアであるが、一歩家の外に出ればそこはタイで、外の人々が話しかけてくれることばも主にタイ語または英語のものである。私は4歳の息子の目にはどんな風に世界が見えているのか、どんな風を感じているのか強い興味があった。それと同時に私は、私の知らない世界で育つ子どもをどのように育てたらいいのか、初めての育児を海外で行うには何が正解かもわからぬ戸惑いの中、手探りで子育てしていたように思う。

* タイ在住 (Eメール: fuminater17@yahoo.co.jp)

私自身は日本で生まれ育ち、国内定住型の人生を送ってきた。海外での経験は高校生の時にアメリカに1年間留学したこと、大学を卒業し日本語教師アシスタントとしてオーストラリアで1年間過ごしたことがあるが、多文化・多言語環境で育ったわけではなく、いずれも自分の意志で渡航した経験である。夫もまた小学校に上がる前に関東県内での引っ越しの経験があるものの、それ以降は移動なく育ってきた。よって、モノリンガル・モノカルチャーで育ってきた夫婦が海外で子どもを出産し、育てることとなったのだ。

出産、子育てを始めて、何年もその状況に疑問を感じることはなかった。私たちの周りにいたのは、同じように駐在でタイに住む日本人ばかりで、バンコクでは日本のものが比較的容易に手に入り、私は日本と同じような生活の中で子育てができていると思っていた。それどころか、私たち夫婦の意識は「日本にいる同い年の子どもができることは必ずできなくてはいけない」「甘やかして育てたら日本に帰った時に親子で恥ずかしい思いをする」「日本に合うモラルやルールを教えておかなければいけない」などというもので、日本にいる子どもと変わらぬように育てなければという強いプレッシャーの下で子育てを行っていた。それは私の自らの意志による海外渡航経験とは異なり、生まれた時から多文化・多言語環境に身を置く、我が子との生活の大きな違いに気付いていなかったからだ。私とは異なる価値観や経験を生きる子どもが育つと思っていなかったし、ひいてはアイデンティティに課題を持ち得る子どもが育つかも知れないことも知らなかった。そのくらい多文化・多言語環境で育つ複文化・複言語の子どもを育てること、国際移動をする子どもを育てることについて無知だった。

子どものことばについては、大学院で日本語教育を学んだ経験から子どものことばの成長には母語が大切であるという知識はあり、とにかく日本語を豊かに育てるという意識を持って、幼児期は熱心に取り組んでいたと思う。スポンジのように、教えれば教えるだけ、素直にことばを吸収していく息子との会話がとても嬉しかったし、一緒に過ごす時間は尊いものだった。

今年、息子は10歳になった。私たちは変わらずタイに住んでいる。日英バイリンガル幼稚園を経て、現在はインターナショナルスクール（以下インター校）に進学し、小学生として最後の学年が始まっている。母語である日本語力を豊かに持った、日本語優位のバイリンガルとして成長している。これは私と息子の多文化・多言語環境で育つ、育てる10年の記録であり、成長を見守る私自身のまなざしの変化、愛着のあった人々や環境の中で息子がどのようにことばを習得したか、それを自信の糧としていかに自立していくか、それらの過程の物語である。

2. 愛着対象との関わり

2. 1. 母との時間

息子は2歳直前でバンコクにある日英バイリンガル幼稚園に入園するまでは、私と一緒に過ごしていたので、たくさん日本語のインプットをしてあげられたように思う。日中は私の日本人の母友達とともに過ごすことも多かったので、同い年の日本人の子どもたちと密に触れ合いながら育った。家では日本語のテレビを観て、私の作る日本食を食べ、日本語の絵本の読み聞かせを楽しみ、日本語の歌を聞いて歌っていた。私は独り言に思えるようなことも常に息子に話しかけていたし、息子は抱っこ紐の中からずっと私の口元を見ていた。一時帰国では、そんな私を見た父が「おまえは本当によくしゃべるなあ」と眩いていたことを覚えている。

日本で生活していたならば、祖父母や親戚、若者や子どもたちなどいろいろな世代がいて、多様な人と触れ合いながら様々なことばを聞いて育つのだろうが、タイでの私たちの生活には登場人物が限定され、息子が聞ける日本語のバリエーションは多くなく、私たち世代の使うことばだけではインプットが偏ると考えていた。そのため日本語のテレビの幼児番組や絵本を積極的に取り入れ、多様な日本語に触れられるよう気をつけていた。海外で子育てする場合、日本語のインプット量は日本にいるより圧倒的に少ない分、母である私がたくさんことばを教えなければと考えていた。日本語の語彙はどんどん増えていき、「生まれた時からタイに住んでいるのにお話が上手だね」とよく褒められていた。

一方で、英語やタイ語はさほど重視しなかった。私がたまに話すのを見ていることはあったが、私から息子に積極的に英語を教えたり、英語で話しかけたりするようなことはほとんどなかった。ただ、当時通っていた習い事は英語で活動するものだったので、英語を聞く機会があった。ただし、隣で私が日本語に訳していたことがほとんどであった。息子は、そのうちあいさつ程度はできるようになったが、知っている語彙は生活から取り入れた数語程度だったと記憶している。

幼稚園入園後は、私以外の大人や友達と出会い、集団生活することでよりたくさんのことばを習得するようになった。それに伴い息子の興味や関心が広がり、世界が広がっていった。特に3歳から5歳の2年間は恐竜の全てが好きだった。恐竜に関するテレビを観て、絵本を読み、図鑑を眺めパズルで遊んでいて、それらに出てくることばを次々に質問してくるようになった。「孵化ってなに?」「繁栄ってなに?」「滅亡ってなに?」という具合だ。私は息子から出る質

問には必ず答えた。すると今度は別のわからない単語を拾って、なにに？と質問してくるようになった。息子がことばを習得し学習していく姿を見るのがとても楽しかった。幼稚園の途中から、このままバンコクにいる、もしくは日本以外の国に移動するならばインター校に進学するのはどうかという選択肢が生まれた。インター校に進学したとしても、いつ日本に帰国となるかはわからない駐在員なので、いつでも日本の学校に入れるような勉強も同時にせざるを得なかった。これもまた「日本に帰った時、勉強に遅れないように」「日本に帰った時、生活に困らないように」という思いが頭にあった。この当時、息子の英語はなんとか自分の伝えたいことを先生に伝えることができる、という程度であったと思うが、英語は幼稚園に任せ、私は日本語をさらに伸ばすために文字を導入し、そして進学前には小学校1年生の漢字を導入したいと考えていた。インター校に入学後はしばらく英語での勉強に苦戦し時間を要することは容易に予想ができたからだ。でも机上の勉強をするのではなく、カルタ等のゲームと一緒に楽しく遊びながら学ぶことをしていた。これもまた親子の楽しい時間の共有だったと感じている。同じように漢字もゲームやフラッシュカードを作って取り組み、年長時にはひらがな、カタカナに加えて、小学校1年生の漢字の読み書きを習得し簡単な児童書は一人で読むことができ、足し算引き算など算数の問題も解けるようになった。進学後はこの学習の貯金によって気持ちの余裕が生まれたことは確かである。息子は今でも時々「漢字のドリルは楽しくない、昔ママが作ってくれたような漢字のカードが良かったな」と嘆いている。

幼稚園には年長の3月まで在籍し卒園を迎えた。多くの人から「インター校に進学するならばできるだけ早いほうがいい」「幼稚園は途中退園して転校した方が良い」「英語での勉強についていけないよ」などのアドバイスももらったが、私は幼稚園の卒園式を経験させてあげたかったし、小学生という自覚を持って進学してもらいたかった。また、周りも大きな学校に挑戦するタイミングで言語教育環境の移動をさせたかった。そして何よりも幼稚園で得た日本語での豊かな時間とことば、それに伴う自己肯定感を存分に持っているこの子ならば、インター校への途中入学でも、英語にハンデはあるだろうが、時間をかければ十分にやっていると漠然と信じていた。

2. 2. 先生が存在

幼稚園はバンコクにある少人数制の日英バイリンガル幼稚園ではあったが、英語よりも日本語を使い、体験を通しての成長が素晴らしかった。愛情あふれる温かい日本語保育担任を「幼

稚園のお母さん」と呼び、強い親しみを持ちながら、幼稚園での集団行動や活動を楽しみ過ごす日々だった。この幼稚園に息子は2歳児クラスである最々年少から丸5年通い、最初の3年をこの先生のもとで過ごすことができた。初めての「先生」であった先生は惜しみなく愛を与えてくれた。

先生は息子のみならず、私にとっても初めての子育ての中で戸惑ったり悩んだりすることに寄り添ってくれた。こんな時どうしたらいいのだろうか、先生は園の中でどんな指導をするのだろうか、どんな声かけや関わり方をするのだろうか、たくさんの悩みを相談し、アドバイスや励ましをもらった。幼稚園からもらった連絡帳は5年間で30冊もあり、そのうちの17冊が先生と過ごした記録であった。幼稚園での出来事を息子が家で話してくれたこと、家での出来事を息子が幼稚園で先生に話したことを共有したものである。先生との密なコミュニケーションをすることで、母子間でより会話が生まれ豊かなコミュニケーションができた。同様に幼稚園においても先生とたくさん話をし、会話の力を育てていたことが推察される。また、学期毎の成績表には、幼稚園で先生を心の拠り所にし、安心できる環境のなかで人間関係を広げ、自信を持ちながらことばを発達させてきたことがわかる記述が多数ある。時系列に沿って紹介したい。

まず引用する部分は、1歳11ヶ月から2歳2ヶ月であった、入園して1学期を過ごした後、成績表に記された先生からのコメントである。

入園当初は初めての集団生活と新しい環境に不安を感じ、母親が恋しくて泣いて過ごすことが多かった。

たくさんの友達とスタッフの中で過ごす雰囲気になかなか落ち着かなかったが、もともと仲の良い友達や日本語で会話のできる日本語保育担任の存在を拠り所として過ごす中で少しずつ落ち着き、保育室内で関心のもてるものを見つけて遊びだしたり、また日本語の時間が始まると降園時間が近いことを理解して期待をもって笑顔で過ごしたりできるようになっていった。

言語については、語彙が非常に豊富で、自分の経験や気が付いたことを簡単な言葉を遣って相手につたえようとすることができる。簡単な歌や手遊び、絵本の読み聞かせなども非常に楽しんでいて、歌の歌詞や絵本の中のフレーズを覚えて口にすることが多い。

今まで経験したことのない、母子分離の寂しさや戸惑いを徐々に受け入れ、先生への親しみを感じながら幼稚園での新しい刺激の中で過ごす姿が書かれていたが、経験や遊びを通してことばの発達に広がりを感じることができる。2学期になるとさらなる成長を感じる。

遊びの姿は前学期と比較しクラスの友達とのかかわりが増えてきている。

遊びの中で自分の思いや考えなどを友達に伝えようとする場面も多く、一緒に遊びを進める楽しさ面白さを感じることができている。

幼稚園入園までは母から離れたところで友達と関わる経験がなかったので、幼稚園の中で先生のもと、友達と関わる楽しさを通して、ことばによる意思疎通の面白さを感じ始めていたことがわかる。

2歳児の最々年少クラスから3歳児の最年少クラスに進級後は、新たに小さい子たちが入園してきた。1学期の成績表には、期待された役割を担い、自信を持っていく姿が書かれている。

クラスに自分より小さい学年の新しい友達が入園してきたことで「おにいさん」という自覚と自信をもち、本児らしさを発揮しながら園生活を送っている。生活面はさらに自分でできることを増やし、できたこと、頑張ったことを認められることに喜びを感じている。

語彙の豊富な本児の思いが相手に伝わりきらない時には、その都度間に入って思いを知らせ合うなどの援助をしてきた。

2学期には、

前学期までは月齢もあり本児と他児との育ちに差が大きく、本児がイメージしていること、友達と共有したいこと、伝えたいことがうまく理解されずに物足りない思いをしている姿も見られていたが、月齢の違う友達が本児に対して非常に親しみを感じながらできることわかることを増やして成長し、特に学期半ばのお店屋さんごっこの経験を受け、保育室でお店をイメージして場所を設け、「いらっしゃいませ」「何が

いいですか」などと掛け声をかけあいながらのごっこ遊びが始まった。

先生に認められることを喜びと感じ、先生の補助を受けながらも友達とコミュニケーションを円滑に行う関係へと子どもたちが相互に成長している様子が読み取れる。この状況に伴い英語も徐々に理解が進んでいった。1学期にもらった英語保育担任からのコメントには、「確実に成長しており、簡単な文章を使うことができる。時に英語と日本語を混乱しているようだが、バイリンガル学習者にとっては予想されるものだ」と記述されていた。しかし、学年の終わりには「語彙が増え4,5語の文章を作ることができ「なぜ?」や「どこ?」などの疑問詞を使い、長い説明や文章を理解することができる」と記されていた。幼稚園が安心できる場所となったことで息子が自信をもち、日本語力の基礎とともに英語での会話力も育ったのではないかと理解できる。

4歳児クラスである年少に進級するとまた変化があった。より多くの新入園児が増え、クラスが二つに分かれ、新しい友達との人間関係の広がりがあった。生活面での自立や自尊心も芽生え、自分で挑戦する意欲をもち主体的に過ごすようになったようだ。また、同時期に家庭でも取り入れ始めていた文字学習も幼稚園で発展して遊びに取り入れている姿の記述があった。

学期の前半は、月齢も高く集団生活の経験も長い本児ができること、わかることが多く生活も遊びも本児一人がクラスをリードしている印象があったが、生活やあらゆる活動、行事への取り組みなどをともにしてくる中でクラスとしての繋がりや一体感が深まり、本児も他児の良いところ楽しそうな姿に魅力を感じて刺激を受けたり時には思いがぶつかり合って葛藤したりと、新しい関係性の中で多くを学び身につけていくことができている。

ひらがなにも関心をもち生活の中で知っている文字を認識してそれを周囲に知らせたり遊びに取り入れたりすることを楽しむ姿も見られている。

2学期になると、今度は成長したことで芽生える心の葛藤とどのように向き合ったらよいかかわからず戸惑うことが増えてくる。何か心が騒ついた時には立ち返る場所として先生の存在があった。

学期の後半頃より、体調の変化や登園のバスの中での出来事などにより登園してくるとしばらく教師のそばでスキンシップを求めたり不安や不満の気持ちを話したりすることが多くなった。できるだけゆっくりと本児の話や気持ちを受け止め、発散することで気持ちを切り替え一日のスタートを良い気分で切れるよう援助している。

(生活面については、) 当番として皆の前で発表をすること、教師やスタッフの手伝いをすること、そしてそれを喜ばれたり感謝されたりすることに大きな自信と喜びを感じている。

様々な経験や体験を通して成長するに連れ、先生への愛着感情だけでなく、周りにいる大人と一緒に過ごす友達にも親しみを強く感じるようになり、より複雑な感情の発達やことばの発達を見ることができるようになる。ことばの発達がいかに周りの環境の中で進むのか、ということが改めて感じられる。先生と過ごした4歳児クラスの3学期のコメントでは以下のように書かれている。

前年度からともに進級した友達を中心に、さらに他のクラスや学年の友達にも親しみをもち、人間関係を広げてきた。教師やスタッフとも信頼関係を築き、安心できる環境の中で本児らしくのびのびと過ごしている。

年間を通してさらに語彙を増やし、経験したこと見聞きしたことや感じたことなどを話すことができる。遊びや生活の中での友達との会話も多く、言葉を介してコミュニケーションを図る楽しさを感じている姿が見られる。時に自分の思いを通そうとして相手に強い言葉を発することもあったが、その都度本児自身に問いかけることでより良い言葉の選び方や伝え方をともに考えてくることができた。

先生との一対一の関係によって愛着が生まれ、その関係の中で集団生活のルールやコミュニケーションを学び、やがて自信や自尊心を持って先生以外の他者とも関係を発展してきた。その経験から多くの語彙を習得し、相手に気持ちを伝え円滑なコミュニケーションを行うための言葉選びや伝え方まで学ぶことで、信頼関係を築く喜びや楽しさを認識し、成長してきた様子

がわかる。これは母子だけの関係からは学ぶことのできない、多くの他者と関わることから生まれる気づきや学習であった。

2. 3. コミュニティーの中で育つ

幼稚園卒園後、息子はインター校に進学する。我が家はこの先もしばらく海外駐在生活が続くことが予想されたので、夫婦で、息子が高校を卒業するまでは家族一緒に駐在生活を送ることを決めた。そのためには英語で教育を受ける必要があるという結論に至り、インター校進学を決めた。進学について私たちの想いを息子に伝え、進学先は私が見学に行き、気に入ったところを息子と共に検討した。

私たちは、少人数だが幼稚園から高校まであるイギリス系カリキュラムのインター校に入学を決めた。この学校には母語話者のための日本語の授業があり、在バンコク日本人家庭には非常に人気の高い学校の一つであった。しかし、私にとって決め手になったのは、タイ人が多く通うインター校であることであった。多くの方はタイ人の多い学校ではなく、多国籍な環境を求めるかもしれない。しかし、タイ生活が人生の全てである息子にとっては、タイから居なくなるローカルの友達がたくさんできることが魅力的であると感じた。

幼稚園の卒園式を終え、その翌週にはインター校の2年生の2学期の途中から登校した。時は2020年の3月のことだった。新型コロナウイルスの影響で、登校して3日目にはオンライン授業に切り替わった。教育環境、教育言語カテゴリーが変わったタイミングでのオンライン授業は、私たち母子にはつらく苦しい試練の日々だった。学校が何かもわからない、英語での授業はとても理解できない、英語で文章を書いたこともなければ、英語の文章を読めるわけもない。授業毎に送られてくる動画を見て、課題を出力し問題を解いて、写真に撮ってアップロードする。それに加えて我が家には半年前に生まれた妹がおり、私は息子に手取り足取り勉強とその周りのことを教えながら、乳児の世話をし、家事や食事の準備をして一日を終える生活を余儀なくされた。息子の英語力の向上だとか友達作りとか、そんなことを考える余裕もなく、毎日をこなすことで精一杯だった。

2年生の後半から3年生の1年間、及び4年生最初の2ヶ月、合計1年半の期間がオンライン授業であった。息子は3年生のはじめに受けたESLの試験では、英語の上達のポテンシャルを見込まれ、ESLではなくメインストリームに在籍していたのだが、オンライン授業期間を終え学校で対面授業を受け始めても、英語が上達することは容易なことではなかった。面談があ

るごとに、担任からは「語彙が足りない」「文法ができていない」「もっと英語の本を読んで」「このままだと5年生ではもっと苦勞する」と言われ続けた。振り返れば、英語の基礎を作る時期が全てオンライン授業で、授業以外は家庭で日本語を使用するので、英語でのインプット量が足りず、学校のオンライン授業だけでは、英語の文法や語彙の習得が難しいのは明白であった。しかし、教育言語カテゴリーが変わったばかりの6～8歳の子どもにオンラインで一日中授業を受けさせ、その後さらにオンラインで英語の補習をさせるなど、私には到底できなかった。従って、課題が残るのは仕方ないことだと思っていた。しかし、それに対する学校の理解や対策がないことは不安に思っていた。一方で、当時の担任のことは大好きな先生の一人として、今でも大変慕っている。初めて対面での学校生活を一緒に過ごした先生であり、何より授業が魅力的であったそうだ。世界中を旅したことのある先生で、教科学習からだけでは無いリアルな経験を伝えてくれることが楽しく、その知識は多岐に渡り、好奇心の強い息子は先生が教えてくれたことを毎日家でも話してくれた。クラスでは英語に不自由さを感じる息子にもたくさん発言するチャンスを与えてくれたことは、彼にとって自信となったに違いない。本来はリーダーシップを取ることが得意で、自己肯定感も高かったが、英語でコミュニケーションを取ることやクラスでの役割を担うことには消極的であった。しかし日本語での知識は豊富だったので、発言のチャンスを与えられれば生き生きと話す姿を見てもらえたと思う。クラスという多数に向けて発言し、その発言を受け取ってもらえた体験によって、彼にとって自分の意見には価値があると感じたことだろう。こういった関わりが彼をエンパワーしたことで担任に愛着を感じたといえよう。このような積み重ねでだんだんクラスにも馴染み、親しみを感じる友達も出来始めたようだった。

5年生になると、カリキュラムの中でミドルスクールというカテゴリーになった。それまでの大きな違いは、専科の先生に教わること、今までなかった教科が増えたことだ。

この年に息子が大きく変化した。4年生の途中から学校のスイミングチームに参加しており、学校で過ごす時間が増え、他学年の生徒とも人間関係が広がり、彼にとって、学校が安心安全な場所になっていった。

学校生活において私が手伝いをするのがほとんどなくなり、年齢的なものも手伝ってどんどん私の手を離れ、何かあっても自分で解決するようになった。また以前はクラスでの役割を決める際「みんなの前で英語で演説するなんて無理」と言っていたのだが、それに挑戦し学級委員の副委員長になったそうだ。私はしばらく経ってからそのことを知った。私はとても驚

き、日々変化していく彼の成長を信じて徐々に手を離していくことにした。また、学園祭ではクラスの友達と一緒に舞台上で英語で歌を歌っていた。これも私は後から知るのだが、とにかく前年までの彼とは全く異なる行動をするので、私は戸惑いながらも自立へと主体的に活動する姿に頼もしさを感じた。

この学年から始まった演劇の授業は彼の得意教科の一つであった。クリスマス発表会でのクラス劇の主役の一人として舞台上に立ち、セリフだけでなく一人で歌う場面もあった。これについて演劇の先生と話した際に、「(息子は)大好きな生徒よ、授業も意欲的だし、彼は本当にパフォーマンスが好きね。クリスマスの劇ではとても輝いていたでしょう」と語っていた。もともとパフォーマンスすることは好きだったのだが、この演劇の授業もまた彼をエンパワーすることとなったと思う。それに加えて彼を認めて褒めてくれる先生の存在は、彼が学校生活の中で様々な事に挑戦する自信になっただろう。その後開催された学校全体の演劇会ではオーディションを受け、役を得た。希望の役ではなかったようだが、全体の進行をリードする重要な役だった。この時も他学年と共に練習をし、演劇メンバーで時間を過ごすことでさらにたくさんの友達が得られたようだった。この演劇会では、入学当初英語で発言することに自信がなく彼らしさを発揮できなかった時とはまるで別人のように堂々と舞台上に存在していた。友達の親たちからも声をかけてもらい一緒に写真を撮っている姿を見て、私は目頭が熱くなった。

成績も不思議なほど向上していった。4年生ではクラスメイトと比較して英語の習得が遅く担任に心配ばかりされていたのだが、私の考えで英語の補習より変わらず日本語を伸ばすことに力を入れていた。5年生になってしばらくすると親友達から、息子について「クラスでよくできる。新しいクラスのスターよ」と言われるようになった。実際に成績は上がっていたが、私にはとても信じられなかった。彼ができるようになったというよりも、周りも同じようにあるいはそれ以上にできていると思っていたからだ。しかし学年の終わりには優秀な生徒の一人として表彰され、再び私を驚かせた。

彼が大きく変化した理由は何だったのか。それは学校という場所が彼にとって愛着のある温かいコミュニティとして成長し、その中で自立と自信を培うことができたからではないかと考えられる。学校は自分の居場所だと感じ、主体的に挑戦できる場になったのだ。コミュニティに受け入れられることは、人を大きく安心させる。現に彼は「水泳チームに入っていてよかった。(トレレーングのため)大好きな学校に休みの時でも行けるから」と言う。息子によると、「4年生の担任と5年生の算数と演劇の先生たちがとても好きだった、毎年3学期に成績

が良くなるのは、先生とたくさん話をして1年の最後には僕のことをよくわかってくれるから成績が良くなるんじゃないかな。先生と離れる時には、少しでも先生の記憶に残る生徒になりたいから勉強を頑張るんじゃない？先生を好きだと英語も上手くなるし、成績も上がるんだよね」とさらっと言うではないか。言語は愛着ある人との関係性の中で育つということを、彼は身を以て体現していたのだ。

2. 4. 友人への親しみ

私は、現地に住んでいれば現地語ができるようになる、ということには懐疑的だ。私のタイ語の能力は、タイに10年以上住んでいても一向に上達しない。もっと話せたらいいなと思うことはあってもタイ語でコミュニケーションする状況があまりなく、タイ人の友達とは英語か日本語で事足りるのだ。「子どもだから現地語の習得も早い」、この言説も疑わしい。ここまで述べてきたように、そのことばを話す人間関係や愛着の気持ちがない場合、また、そのことばで話したい相手の存在がなければ、そのことばは発達しない。

息子のケースはどうなのかというと、教科としてのタイ語は得意ではないようだ。タイ語の勉強は幼稚園から始まっており、タイ文字を読むことができ、体のパーツや食べ物などの語彙を楽しく学習していた。幼稚園で親しみを寄せるタイ人の先生が教えてくれていた時はたくさんタイ語を披露してくれていた。しかしインター校に入り、低学年のうちはネイティブ・ノンネイティブと分かれていたタイ語の授業も、学校の仕組みの変化の中でネイティブと同じタイ語の教科書を使い、ネイティブの中でも成績の良い子たちを Upper Thai クラス、成績があまり良くない子たちとノンネイティブを Lower Thai クラスとしてクラス分けされると途端にやる気を失っていった。しかもタイ語の先生の教えるスタイルがタイ式でとても厳しかったようであり、先生に親しみを覚えることもなかった。もちろんタイ語の授業は好きになれなかったようだ。

ところが、多くのタイ人の親友達が、私に「(息子は)タイ語を理解しているよ」と教えてくれるのだ。タイ語で話しかけると、彼はなんらかの反応をする。彼の口からタイ語を話すのを聞くことはほとんどないが、頷いたり、英語で答えたりしている。それについて本人に聞くと、「友達が話しているところを見ていて、状況とか表情とかを見ながら、知っているタイ語が聞こえたらその前後は推測してわかるようになった」と言っていた。息子の場合は、幼い頃から多文化・多言語の環境におり、ことば以外の非言語コミュニケーションに関わる認知能力が高

く、推測する力が高いことは感じていたため、これらの能力とともに自分の持っている様々な能力をフル活用して理解を高めていったことが推察される。

3. おわりに

これまで、母として子どもの言語教育に関わりたい気持ちを持って、母子で温かい時間を過ごしながら日本語を教えてきた。その期間に、私たちに寄り添ってくれる先生と出会い、また息子がそれぞれの教育カテゴリーの中で、愛着を持った大人や友達、コミュニティと関わりながら育ってきたことが明らかになった。今まで点でしか見てこなかった育児が、「愛着」というキーワードで繋がり、複文化・複言語育児の全体像と、自立していく息子の成長過程が立体的に浮かび上がってきたことに、私自身がとても驚いている。

育児を始めた当初は自分が育ってきた日本を基準とする子育てで、育児をしながら育児本を読んだり子育て講座等を受講したりしていくうちに、私が育てているのは日本人であるが多様性に富んだ人間なのに、日本基準の子育てで良いのだろうかという疑問を感じるようになった。そこで改めてバイリンガル教育や国際移動する子どものこと、複文化・複言語主義について学び「その子どもの持っている能力を総合的に使えるように支える」ための育児に変化してきた。それでも駐在員家族である以上、いつかは日本に帰るため日本を意識せざるを得ないが、日本に囚われ過ぎるのもどこか違うような気がしている。私自身もその狭間で揺れ動いていることは否めない。今でも課題にぶつかれば不安になり何が正解かもベストかもわからなくなるが、必要以上に不安に陥ることなく、ベターな選択を探し、彼を信じサポートすることに徹しようと思えるのは、この10年で培った彼自身の経験や学習、成長を感じることができるからだ。何の疑いもなかった日本基準の育児から、悩み考える育児になったことで、私は私自身が変化することを恐れなくなった。

「ことばを学習するのはなんのため？」日本語教育を勉強していた頃、幾度となく先生方から、そして今バンコクの師からも問われる質問だ。ことばを学習するのは、自分を表現し、自分を正しく知ってもらうためだ。学習者が話したいのはいつも自分のことなのだ。

本稿を書き始めた頃、「タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会」のワークショップ、「マップを描き、マップで語る わたしたちの言語・文化体験-親と子どもと教師たち-」に親子で参加する機会を得た。研究会で開発した、関係性マップおよび言語マップを

各々作成した。息子の関係性マップには、現在彼の身近にいる人々との関係が、深く強く繋がる太線で描かれていた。そのことに、私は大変喜びを感じた。言語マップには、タイ語、英語、日本語を表した外環境に、幸せシールが貼ってあり「ずっと楽しい」と書かれていたことに、私も幸せを感じた。

冒頭の質問を、息子に今もう一度聞いてみる。「家の中は日本語、一歩外に出たらタイ語と英語。全てがわからないって、どんな気分?」。返ってきた答えは「ちょっと confusing だけど、慣れるよ」だった。

自己や周りの環境を肯定的に捉えながらも、今後成長するにつれてさらに混乱することもあるだろう。それでもこのまま逞しく健やかに育っていつくれたらと心より願う。

文献

川上郁雄(編)(2013). 『「移動する子ども」という記憶と力——ことばとアイデンティティ』
くろしお出版.

近藤ブラウン妃美, 坂本光代, 西川朋美(編)(2019). 『親と子をつなぐ継承語教育——日本・
外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版.

中島和子(1998). 『言葉と教育』海外子女教育振興財団.

ポロック, デビット・C., ヴァン・リーケン, ルース(2010). 『サードカルチャーキッズ——
多文化の間で生きる子どもたち』(嘉納もも, 日部八重子, 訳)スリーエーネット
ワーク.